

第1回 国語

【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 問題は□一から□四まであります。試験開始の合図があったら、まず、□一から□四まで問題がそろっているかを確認、次に問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3. 試験中は試験監督しけんかんとくの指示に従うこと。
4. 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為ふせいこういとみなすことがあります。疑われるような行動をとらないこと。
5. 試験終了しけんしゅうりょうの合図があったら、ただちに筆記用具を置くこと。試験終了後に、書きこんだ場合は不正行為とみなします。
6. 解答に字数制限がある場合は、句点(。)、読点(、)、かぎカッコ(「」)も一字として答えること。
7. 問題文は、作問の都合上一部改変しています。

受験番号	
氏名	

一

漢字に関する次の間に答えなさい。

問一 次の1～5の——線部の漢字の読みがなを答えなさい。

- 1 車窓からの風景を楽しむ。
- 2 著名な作家の講演を聞く。
- 3 博物館で貴重な資料を見る。
- 4 南国の秘境を訪れる。
- 5 学校の裏庭に集合する。

問二 次の1～5の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 技術がカクシンされる。
- 2 ショウライの夢を語る。
- 3 住居がミッシェウした地域。
- 4 布をサイダンする。
- 5 的をイタ意見だ。

二

次の①～⑤の熟語について、上の字と下の字の関係はどのようなのですか。適当なものを後のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 寒暖 ② 作詞 ③ 土砂 ④ 無限 ⑤ 敬語

- ア 同じような意味の字を組み合わせたもの (例 岩石)
- イ 反対または対になる意味の字を組み合わせたもの (例 上下)
- ウ 上の字が下の字の意味を説明(修飾)しているもの (例 最高)
- エ 下の字から上の字へ返って読むと意味がよくわかるもの (例 着席)
- オ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの (例 無効)

三

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

学びをまた別の角度からとらえると、①困ったときに臨機応変に処理できる力を養う、というふうにも言えるでしょう。

自然・社会が変化すると、持ち合わせの知識では通用しないようなことが起こります。A、これまでのやり方で作物を育てていたけれども、日照りが続いて、ほとんど作物がとれなくなってしまった。そういうことは、これまでの歴史の中で、多くの人々が経験してきたはずで

そのとき、②ある種の危機管理能力・臨機応変力を持っている人は、新しい栽培方法を試してみるとか、今までとは違った作物を育ててみるとか、少しの収穫でもたくさんの人が食べられるような料理を考えると、いろんな知恵を使って乗り越えることができたはずで

す。

学ぶというのは、既存の知識を頭の中に刷り込んでおくことだけに留まらず、そのときどきに起こる問題に対して、的確かつ臨機応変に対処していくことです。そこでは決まった答えなんてないから、自分でつくり出していかなければなりません。学びの中では、そういう訓練をしていくことも、とても大事なことです。

学校の理科の時間に、さまざまな実験をしたいと思います。授業では、実験結果がわかりきっていることをやるので、あれは本来の実験とは

言えないですね。実験というのは本来、まだ答えが見つかっていないもの、ことに対して行うものです。ひとつの条件を変えたとき、どのようなデータが出てくるのかを観察するというときもそうです。自分なりにいろいろと試行錯誤しながら、答えを探し出していく。これが実験の重要な目的のひとつです。

生活の中で、何か困ったことが出てきたとします。たとえば、「うちの母ちゃん、入院しちゃったんだよ。どうやってご飯を作ろうかな」というとき、どう切り抜けていくか。そこで自分なりに考えて、料理をつくってみる。何度かつくっているうちに、「考えて工夫すれば何とかなるんだな」ということがわかってくるでしょう。そこで得た自信が、その後の生きる力になっていくわけです。

そういう意味では、いっぱい失敗したほうがいい。うまくいかないという体験は、臨機応変力を鍛えます。勉強でも、部活でも、何でもそうです。失敗したこと自体が、ひとつの大きな学びになります。そういうふうにとらえる視点を、ぜひ大切にしてください。

先ほど、教養というバランス力を身につけるためには、考え続けることが大切だという話をしましたね。

特に、何のために生きるのか、どう生きてらいいのかということを生懸念考えることは、自分の人生を意味あるものにするためにとっても大事なことです。

人間というのは、自分で生きる時代や場所を選べるわけではありません。③偶然、命を授かり、産み落とされたら、その時代、その社会を、生きていかななくてはいけません。人間とは、そういう存在なのです。

貧しいスラム街で生まれる子もいれば、紛争地のど真ん中で生まれる子もいます。生まれるところもさまざま、子どもはそれも選ばれません。生まれてからの条件にしても、何不自由ない裕福な家庭の子もいれば、塾に行かせてもらえない子、明日食べるのも大変だという子もいます。その中で「④自分は生まれてきて、本当によかった」と思うために私たちは何をすればいいのでしょうか。

B、その答えは簡単には見つかりません。いろんな人の意見を聞きつつ、試行錯誤していくしかないでしょう。

いろいろな生き方ができますが、やっぱりあとから振り返ったときに、「生きていてよかった」と思えるほうがいい。「頑張って生きてよかった」「世界広しと言えども、この体験は私だけの唯一のものだ」「私なりに、人生が深い喜びに満ちているということを知った」。せっかく生きるのだったら、そんなふうに見えるほうが得です。

ときには、一度決めた考えを変えなくてはいけないこともあるでしょう。そこで**X**転**Y**倒しながら、自分の生き方について一生懸命考え続けていく。それしかないのです。

そこで考えることを怠ったら、それ以上幸せになれないかもしれない。だから本当に幸せになろうと思ったら、とにかく考え、いろいろ

なものを学び取っていくことです。

それぞれが、与えられた命を充実させていく方法を探っていく。少しでも幸せな人生が送れるよう、自分なりに考えていく。さらには、たった一度しかない人生だから、できたら楽しく面白いことをやろう、と。「学ぶ」ということの目的は、結局、これらを探することに尽きるのです。

皆さんもそうだと思いますが、日本の多くの若い世代は、極めて狭い枠の中で生活しています。学校に行っても、授業、宿題、試験……の繰り返しで、「何のために学ぶのか」なんていうことを、ゆっくり考えている暇はありません。

常に何かに追い立てられている感じで、つい「言われたことをやるしかない」という態度になりがちです。

C、ぜひ、いったん立ち止まって、「なんで、この問題を解かなくてはいけないんだろう」「なんで、こんなことを覚えなくてはいけないんだろう」と考えてみてほしい。「なんで？」と考えなくなる、学びについての、さらに深い問いには行き着かなくなりまして。「だって、入試があるからでしょ？」でおしまいです。あるいは、「勉強しないと先生に叱られるし」「偏差値が下がるから」という程度でしよう。目の前の目標を達成することしか頭にないと、なんのために学ぶのかというところまで、考えがいかないのです。

「何のために？」と考え続けるのは、たしかに面倒めんどうです。答えが、すぐには出ないのでから。しかし、自覚的に生き、与えられた命をできるだけ意味あるものにしたのであれば、折に触れて、⑤学まなぶ目的めくを考えることはやはり必要なのです。

考えることをやめてしまうと、どうなるでしょうか。マスコミや流行りの意見に安易に流されます。「時代の風潮がそうだったから」などと言い訳して、やがて思考が停止してしまいます。

(汐見稔幸『人生を豊かにする学び方』)

問一 [A]・[B]・[C]に入る接続語として適当なものをそれぞれ選び記号で答えなさい。

- ア でも イ そして ウ たとえば
エ つまり オ もちろん

問二 —— 線①「困ったときに臨機応変に処理できる力を養う」には何が必要だと筆者は述べていますか。本文中から十二字で抜き出さなさい。

問三 —— 線②「ある種の危機管理能力・臨機応変力を持っている人」の行動として最も適当なものを次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 少しでも危険を感じたら深入りせず、事前に予定していたように動き、危険を回避する。
イ 結果がわかりきった実験を行い、違う結果が出るまで繰り返し、何度でも挑戦する。
ウ 生活の中で何か困ったことが起きたとき、周りの人に助けを求め、即座に対応する。
エ 持ち合わせの知識では通用しないようなことが起こったときに、さまざまな知識を駆使して乗り越える。

問四 —— 線③「偶然」の対義語を漢字で答えなさい。

問五 — 線④「自分は生まれてきて、本当によかった」とありますが、そう思うためにすればよいことは何と筆者は述べていますか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 自分が知らないだけで、人生には深い喜びがあふれていると理解すること。

イ 悩んだ末に決めた自分の考えを、曲げることなく最後まで貫き通すこと。

ウ ともかくにも考えて、さまざまなものを学び取っていくこと。

エ 何度もよく考えた上で、特定の枠の中でのみ生活していくこと。

問六 — X・Yに入る漢数字をそれぞれ答えなさい。

問七 — 線⑤「学ぶ目的」とは何と筆者は述べていますか。本文中の言葉を用いて七十字以内で具体的に説明しなさい。

問八 本文の内容と合致しているものを次のア～エよりすべて選び、記号で答えなさい。

ア 学びの中では、自ら答えを作り出す訓練をすることも大切である。

イ 失敗そのものが、一つの大きな学びになるという視点を持つことが重要である。

ウ 生きる理由や、生き方について考えることは非常に大切である。

エ 幸せになりたいのであれば、何事にも全力で挑み続けるべきである。

四

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

母とともに大きなポプラの木のある「ポプラ荘」に引っ越してきた「私」は、精神的な理由から、体調が優れず、学校に行けなくなってしまった。仕事が忙しい母に代わり、昼間は、ポプラ荘の大家である「おばあさん」が、「私」の面倒をみることになった。

「毎朝おばあさんが出かける時に、千秋はおばあさんのところに行くのよ。おばあさんがね、千秋のためにお布団を敷いておいてくれるって」

①母の言葉に、私は非常なショックを受けた。あの妙な御札の貼つてある、古い本だらけの、雨戸が一枚しか開いていない部屋で寝ていると言うのか。しかもおばあさんは最初に「子供お断り」と言ったのだから、子供好きではないだろう。これではまるで、悪い魔女の住処に送り込まれるようなものではないか。

「おばあさんが、うちに来るんじゃだめなの」

「おばあさんは、膝がこの頃悪くって、階段の昇り降りがづらいんですって。それにそばで寝ていてくれたほうが心配しなすむって」

母はちよつと笑って、私のほつぺたを人さし指で軽くつついた。

「昼間だけよ」

「うちでちゃんとおとなしくしてるから」

「おばあさんがお仕事から帰ってきたら、一緒に帰るの。ね、わがまま言わないで」

そう言われてしまうと、もうどうしようもなかった。それに、もし私が行かなかったら、おばあさんは気を悪くするにちがいない……

翌日から、私は母と一緒に「②出勤」した。

【中略】

私はおかつば頭に櫛を入れ、いちご模様のいいほうのパジャマの上に着いた毛糸で編んだカーデイガンを着て、おばあさんのところへ行く。「おはようございます」と挨拶して、おばあさんの敷いてくれたずっしり重い綿の布団にもぐり込む。最初の二、三日は、眠ってしまったのが不安だった。おばあさんはおばあさんで私が眠っていると思っているのか、それとも私に興味がないのか、「薬の時間だよ」とか「体温を計りなさい」などという時以外は話しかけてもこないから、私はただひたすら柱時計のカチコチいう音をききながら、まんじりともせずにした。

しかし、ただ寝ていればすむというわけではなかったのだ。

昼になると、私は母の持たせてくれたおむすびをふたつ食べる。おばあさんはいつも決まって冷や御飯に昆布の佃煮、それから中身がたいていは蕪の味噌汁という献立である。この味噌汁を、おばあさんは私にも振る舞ってくれるのだが、私の母は蕪の味噌汁を作らなかつたし、どろどろに煮えすぎた蕪も、後で喉がかわいて仕方がない濃い汁

も、「さすがにこのおばあさんの作るものだ」と納得してしまうほど、私には難物なのだった。

おばあさんは、私が※辟易へきえきしていることなど少しも気づかず、いつも最後の一滴まで残さず味噌汁をすすする。汁をぜんぶ飲んでしまったお椀に残った蕪の葉っぱを、大事そうにお箸はしでつまんで口に運ぶ。下の前歯三本しか歯のないあの口で、漬物つけものでも草加せんべいでも何でも食べてしまうのだから、私はついおばあさんの食事する様子に見とれてしまいがちなのだが、そうやっておばあさんのほっこり開いた洞窟どうくつのような口に魂たましいまで吸い込まれそうになっていると必ず、おばあさんはじろり、とこちらを見て言うのだ。

「おや、すすまないね」

すると私は大慌おおあわてで、お椀の中身をかきこむのだった。「食欲がない」などと母に報告されたら、この苦役から解放される日が、遠ざかることになる。

さらに悪いことに、おばあさんは煎じ薬を私に飲ませるのである。それは薄甘うすいような苦いような酸っぱいような、なんとも得体の知れない味の薬で、おばあさんが毎日「血めくの巡めぐりをよくするために」飲んでいるものだった。初めて飲まれた日、おばあさんの家のなかの妙なにおいは、この薬のせいなのだとということがすぐにわかった。

「元気になりたかったら、我慢がまんしてお飲み。そのうち慣れるから」

③私は目に涙をため、吐きそうになるのを必死にこらえて、薬の

入った湯呑みに描いてある梅の花の絵をにらみながら、それを飲み下す。もしも私がおばあさんのような年寄りになったって、こんな味に慣れたりするものか、と思いをながら。

重い布団と、蕪の味噌汁と、煎じ薬の何日かを、私は文字通り黙々もくもくと消化した。何を喋しゃべったらいいかわからなかったし、喋って失敗するくらいなら黙っているほうがいい、という何とも X な気持ちだったのだ。おばあさんは、どうだったのだろうか。やはり子供は苦手だ、と思っていたのかも知れない。

【中略】

「おばあさん、蕪の味噌汁、好きなの？」

「ああ好きさ」

「どうして」

「どうしてって、好き嫌いにどうしてもこうしてもありやしないよ」
おばあさんは相変わらず、自分から話しかけてくることは滅多めったになかったが、私が質問すれば答えてくれた。多少④そっけない答えかたではあったけれど。

「おばあさん、何歳」

「さてね」

という具合に。

でも、時にはもつと長く話すこともあった。たとえばある日、私はおばあさんの後頭部にハゲを見つけた。おばあさんは、顔こそ薄黒く

てしわも深かったけれど、髪は少しの黄色みもないきれいな白髪で、ふうわりと持ち上がる程度に癖のあるその髪を、おかつぱ頭の私と同じくらいに短く切って後ろになでつけていた。考え事をする時など、おばあさんはよく掌を頭のでっぺんより少し下がったところに置く。私は、おばあさんがいつも手を置く辺りの白髪がちよつと割れて、顔と地続きとは思えないほど艶のある地肌がのぞいているのを見つけたのだ。

「おばあさん、女でもハゲの人っている？」

私は精一杯遠回しに訊ねた。これならおばあさんのことを言っていると気づかれることは絶対にあるまい、と思っていたのに、おばあさんはすぐにわかって「ああ、これ」と髪に手をやったから、私は身の縮む思いだった。けれどおばあさんは気を悪くした様子もないようで、「あたしはね、若い頃癩性で、なんでもきつちりやらないと気がすまなかったからね。鬚を結うのに、頭の皮が浮き上がるくらいきつく縛ってた。そのせいだよ」

「マゲって何」

「マゲってのはマゲさ。昔の人間のあたま」

「水戸黄門のテレビにでてくるみたいなのやつ？」

「あれはちよつと古いけど、まあそんなもんだよ」

「おばあさん、着物着てた？」

「着てたよ。昔はみんな着物」

「……きつく縛るとハゲちゃうの？」

「そうだよ。あんたも気をおつけ」

「うん、気をつける」

そうやって⑤言葉を外に向かって発するようになると、外側からも、いろいろなことが私のなかに流れ込んできた。私はポプラの木が日ごとに葉を落としていく様子を面白く感じた。いくぶんまばらになった葉の間に、赤い実をひとつ見つけた時は、興奮してさえた。

「あれは、カラスウリ」

と、おばあさんは教えてくれた。

「蔓が巻きついてるんだよ。そのうち鳥がつつきにくる」

おばあさんの庭に、野良猫がよく来ることに気づいたのも、ちょうどこの頃だったと思う。フッキソウやシヤガなどの下生えにもぐりこんでいたり、土の上に放り出してある青い火鉢のふちに乗っかっていたり、猫とつておばあさんの庭は、なかなか居心地がいいらしかった。毎朝、おかあさんの作ってくれたおむすびと一緒に、私は牛乳の少し入ったコップを持って家を出るようになった。おばあさんは、糞をするからいやだとか、鳥が来なくなるとか言いながら、ふちの欠けたお皿を出してきてくれた。私はそのお皿に牛乳を注ぎ、濡れ縁のすぐ脇にある、物干場に置いた。

(湯本香樹実『ポプラの秋』)

※辟易…うんざりすること。

問一 — 線①「母の言葉に、私は非常なショックを受けた」とありますが、「私」はなぜショックを受けたのですか。五十字以内で説明しなさい。

問二 — 線②「出勤」とありますが、この言葉から読み取れる「私」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 母の言うことを聞いている自分を大人だと思い、誇らしくなっている。
- イ 仕事に行く母と同じように、自分も出かけるように仕向けられ、つらくなっている。
- ウ 母やおばあさんのために、行かなくてはならないという義務感にかられている。
- エ 行きたくない場所に、母に無理矢理連れて行かれ、憂鬱ゆううつになっっている。

問三 — 線③「私は目に涙をため、吐きそうになるのを必死にこらえて、薬の入った湯呑みに描いてある梅の花の絵をにらみながら、それを飲み下す」とありますが、なぜ「私」はそのようにしたのですか。その理由を「くから。」に続く形で、本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四 X にあてはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 消極的
 - イ 感傷的
 - ウ 意識的
 - エ 悲観的
- 問五 — 線④「そっけない」とありますが、おばあさんの「私」に対する「そっけない」様子が分かる部分をこれより前から八十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問六 ——— 線⑤「言葉を外に向かつて発するようになると、外側から

も、いろいろなことが私のなかに流れ込んできた」とはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんと話すことで、自分の気持ちを整理することができ、今までは見たくないと思っていたものを見られるようになったということ。

イ おばあさんと話すことで、今までよりも自分に余裕ができ、今まで気づかなかったことに目が向くようになったということ。

ウ おばあさんと話すことで、世界が広がり、今まで自分が知らなかったことを新たに知ることができたということ。

エ おばあさんと話すことで、自分以外のことにも目がいくようになり、周りの小さな変化に敏感びんかんになったということ。

問七 本文の表現を説明したものとして最も適当なものを、次のア～

エより選び、記号で答えなさい。

ア 比喩ひゆ表現を多く用いることで、「私」から見たおばあさんの様子が分かりやすく描写されている。

イ 「私」とおばあさんの心情を交互に描き出すことによって、登場人物の心情の変化を感じ取ることができる。

ウ おばあさんや母に対する「私」の態度や心情が、「私」の視点を通して主観的に描かれている。

エ おばあさんと母の様子を対比することによって、「私」との関係性の違いを読者に示している。